

吉岐に斃れた雪(伊吉)連宅満挽歌

石田野に 宿りする君 家人の い
づらとわれを 問はば如何にいはむ

(巻十五—三六八九)

『万葉集』第十五巻は前半に遣新羅使の歌、後半に中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子の贈答歌を配する。本歌は前半

の遣新羅使歌群の一首、「吉岐の島に到りて、雪連宅満の忽に鬼病に遇ひて死去りし時に作る歌一首 短歌を并せたり」とある三六八八番長歌の反歌。作者は不詳。挽歌とする左注をもつ。

目録によると、この遣新羅使は天平八年六月に出發した大使安倍朝臣継麻呂、副使大伴宿禰三申らを中心とする一行であった。雪連宅満の役職は不明。『新撰姓氏録』によって渡来系の氏族で、書記官かと推測されている。

鬼病は一般に疫病の鬼が流行らせる



伝雪宅満の墓

疫病、赤痢やチフス、天然痘などをいうが、亡くなったのは一人とすると疫病ではあるまい。新羅に行く途中の吉岐の島で亡くなった。

作者は長歌で、家族が斎わぬわけでも自ら過ちをしたわけでもないのに亡くなった友を悼んだ後、「家人は待ちか恋ふらむ」と長歌に歌うように、帰京後、今か今かと待ち焦がれている雪連家の人々が、息子はどこかと尋ねた時、どう伝えたら良いのか、その思い悩み、途方に暮れる心境を歌うのであ

る。その整理できない思いを五・七・六・七・九と字余りを含む句で表現している。

作者は宅満の母を知っており、その顔が思い浮かぶのであろう。長歌には宅満が母に「秋には帰りましょう」と告げたと歌う。何と伝えたら良いのか、そう歌う辛い思いはよく分かる。死は如何に説明しようともはや取り返すことのできない喪失であり、家族を得心させる表現などないからである。宅満の葬られた吉岐の地は都を遠く離れた島であり、容易には訪ねえない。今その墓と伝える盛り土は、印通寺港の北西、石田の小高い丘の上の墓地にある。

時代、立場、置かれた境遇は異なり、死に近い時代であったとはいえ、二次大戦の帰還兵士たちが同じ部隊の亡くなった友の消息を語った心境と重なるであろうか。読む者の深い共感を誘う歌といえる。今墓前には歌碑が立つ。

(万葉古代学研究所所長・寺川眞知夫)